

〈報文〉

## 19世紀アメリカの女性のリフォームドレスについて —女性と「パンツ」—

谷 紀子（京都女子大学大学院家政学研究科生活環境学専攻博士後期課程）

American Women's Reform Dress Movement in the Nineteenth Century  
—Women and Pants—  
Doctoral Couse Student, Kyoto Women's University

Noriko Tani

The mainstream of the western women's style of clothing during the nineteenth century was long dresses corseted thinly at the waist, with many layered spread skirts. In the mid-nineteenth century, the women's reform dress movement occurred in the United States, where Bloomers style (Bloomers) became popular in 1851. In Bloomers style, women wore loose 'pants' under a short skirt dress. This style became a boomed at that time and became a major epidemic, even affecting European women's fashion. However, it did not take root as a fashion style. Why was such a fashion style different from the other styles of that era born? The author noticed that before the 'Bloomer Costume' in 1851, women were wearing 'pant' on various examples of wearing 'pants' in the early 19th century in the United States, the author examines how the Bloomer style was born.

### はじめに

19世紀の西洋の女性の服飾は、コルセットでウエストを細く整えて、広がったスカートを何枚も重ねた長いドレスを着るのが主流であった。19世紀中頃アメリカ合衆国で、女性のリフォームドレス運動がおこり、1851年にブルーマースタイル (Bloomers) が流行した。これは短いスカートのドレスの下に、ゆったりした「パンツ」を履くものである。このスタイルは当時ブームとなり大流行し、欧州の女性のファッションに影響を与えたが、定着することはなかった。本稿ではこのような同時代と異なるスタイルがどのように生まれてきたのかについて考察する。

同時代、「リフォームドレス」や「フリーダムドレス」と呼ばれ、着用された、様々なドレススタイルがあった。ブルーマーが登場する前のアメリカでは、女性にパンツは着用されていたのだろうか。その問いに答えるためにここでは、1851年

以前、アメリカ女性たちに着用されていた「パンツ」の変遷をとりあげる。

ブルーマーに関する先行研究は、国内外において多数見られる。

本稿では、アメリカ史学の研究家、ゲイル・ヴェロニカ・フィッシャーの博士論文 "*Who wears the pants? Women, dress reform, and power in the mid-nineteenth-century*" (1955 UMI dissertation services) および2001年の著書 "*Pantaloons and Power -a nineteenth-century dress reform in the United States*" (The Kent State University Press ,Ohio 2001) を中心資料として取り上げる。

### 1. 19世紀アメリカの歴史的背景

当時のアメリカ合衆国の簡単な年表は、以下の通りである。

1789年 アメリカ合衆国憲法制定 ジョージワ

- シントン大統領  
 1803年 ルイジアナ買収 フランス人は西部から追い出される  
 1812年 米英戦争  
 1830年代 アメリカ・インディアンに対して南東部から不毛の地、西部への強制移動  
 1846年 米墨戦争 対メキシコ 領土の拡大  
 1847年 モルモン教徒のユタへの移動  
 1861年から1865年 南北戦争  
 1865年から1890年 西部開拓時代（文献1）

## 2. 19世紀の女性の服

はじめに述べた通り、19世紀のアメリカ女性の服飾は、コルセットでウエストを細く整えて、広がったスカートを何枚も重ねた長いドレスが主流であった。1820年代には、ハイウエストのシルエットの位置が戻り、広がったシルエットのスカートに変化していく。スカートの下に7、8枚ペティコートを重ね、大きくなっていった。1850年頃は、クリノリンスタイルが流行する。スカートの大きさは歴史上最大になる。1870年代になるとスカートの膨らみを腰部の後方によせたバスルススタイルに変化した。当時は、ヨーロッパの流行を多少の時差はあるものの、アメリカの女性たちは、東部から西部へと取り入れていた。

## 3. フリーダムドレス (Freedom Dress) から「ブルーマー・コスチューム」へ

女性服のリフォームドレス運動がおこり、1851年にアメリカ・ジェンクス・ブルマー（1818-94年）による「ブルーマー・コスチューム」が登場する。最も語られ、広く受け入れられている「ブルーマー・コスチューム」の始まりについては、フィッシャーによると（文献3、p. 3-11）、エリザベス・スミス・ミラーが従姉妹のエリザベス・キャディ・スタントンを訪問した時に、短い丈のスカートの下にゆったりした「パンツ」の組み合わせを着用していたというものである。その着想は、ヨーロッパの健康用温泉施設でいくつかの形のドレスをみた事による。後にエリザベス・C・スタントンは、ブルーマーにそれを試すよう説得した。アメリカ・ジェンクス・ブルマーは、禁

酒運動の為の雑誌の「リリー」(“The Lily”)を発行、執筆していたが、後に女性の権利運動の機関紙となっていく。アメリア・ジェンクス・ブルマーは解放感のあるこの服を気に入り、1851年に「リリー」に掲載して、1ヶ月で発行部数が増えて「ブルーマー・コスチューム」が流行した。ブルーマー夫人が他の女性権利運動家たちとの活動の地のニューヨーク州セネカフォールズから米国東海岸北部地域へ、このスタイルが、北部から全米、ヨーロッパ諸国に広まった。このときブルーマー・スタイルが登場したのである。このスタイルは、農村や工場勤務労働者の女性たちにも流行した。（図1）

「オリエンタル」なイメージは、「ハーレム」や「トルコ風」のイラスト画に含まれて広まった。アメリア・ジェンクス・ブルマーは、上記の「リリー」の執筆者であり、このリフォームドレスを紹介した人物である。フィッシャーによる（文献3、p. 3-11）と、出版関係者たちは、「ブルーマーリズム」「ブルーマーズ」などと呼び、よく知られた名詞として受け入れられていった。「ブルーマー (Bloomer)」は、アメリア・ジェンクス・ブルマーのラストネームであると同時に「花」という意味もある。性的なめかしを暗示したのかどうか分からないが、とりわけ花は女性の生殖器



図1. 「ブルーマー・コスチューム」のアメリア・ジェンクス・ブルマー

膝丈の短いスカートと適度に広がったパンツをはく。胸部は鯨の骨を入れない。サッシュやベルトで絞めた。丸い帽子をすすめた。外套を着ている。出典：文献2

を連想させることがある。もし、彼女がミドルネームを用いたなら、「ジェンクシズム (Jenksism)」は、国を超えて広まったのであろうか？なぜ、出版関係者は、スタントンのファーストネームからラストネームをそのパンツスタイルの呼称に用いなかったのだろうか？「ブルーマー」の名詞は歴史の偶然の事故として残ったと言えよう。ブルーマー夫人は、「カメラ」と名前を提案したが「出版関係者は拒絶した。」ということである。

#### 4. 1851年以前の女性たちの「パンツ」

1851年以前にはアメリカ各地で、女性たちの「パンツ」の着用がみられた。

尚、「パンツ」という表記、呼称は、当時アメリカではズボンを意味するトラウザーズの俗語として使われていた。したがって「パンツ」は運動用、仕事着用のズボンを意味している。

##### (1) モルモンドレス (1827年-1848年)

私的なリフォームドレスが存在したのが確認されている。「モルモンドレス」は、モルモン教徒がミシガン州ビーバー島で「短いガウンとズボンのスタイル」を主に家庭の私的な空間で着用していた。

##### (2) ロバート・オーウェンの「平等主義」

ロバート・オーウェン (Robert Owen) は、ニュー・ハンプシャーで女性のパンツ・ドレスの組み合わせを最初に紹介した (図2)。彼は、1825年10月にインディアナ州ニュー・ハーモニーに「平等主義」のユートピアの共同体 (1824年-27年)を開いた。そこでは「平等」を目指して、「平等」を女性の服飾で見た目に知らせる意図があった。それがパンツ・ドレスを紹介した理由である。彼は英国生まれで「労働組合の父」と呼ばれた理想主義的社会主義思想家である。共同体には世界中から人を招き、900人程で「平等主義」の共同体を作った。男性、女性、子供、人種、宗教、階級、所属 (政党)によらず幸福を追求し、魂の救済は平等性により達すると信じていた。2年ほどで、人々の等しい仕事の価値への不満から、この共同体の解散をもたらした。オーウェンは、女性

の贅沢なドレスを批判し、その排除を認めた。そしてその区別を失くすことによって、平等の社会を約束した。当時の男性の服装は、ジャケットとズボンに外套であった。オーウェンは女性の服飾で、特に「ショートドレスとパンツ」のスタイルを選んだ。財政の平等さを、女性の服飾で見た目に知らせる意図があったのが理由である。また、女性の平等を示す為に、「パンツ」で性の平等をつくる事を考えていた。



図2. 自分でデザインしたイラスト画を指さすロバート・オーウェン  
出典：文献3 p. 87

しかし、オーウェンは新しいコスチュームをコミュニティ全ての女性に着せるのに成功はしなかった。コミュニティ員たちはアイデアを出し合った。

フランシス・ライトは、「無地で白いモスリンを、身体に巻きつけて、ギリシアの像のドレーパリーのような平等にみえるコスチュームを自身で提案していて、これが他の女性たちに着られたという記述がある。(文献3、p. 82、p. 86)

サラ・ピアーズは、ファッションの興味をぬぐいされず、ドレスとその美しさを考えた。このように、「平等主義」の点から服装について議論され、様々な提案があった。

カール・ベンハードは、少年のための、スケルトン・スーツのデザインを考案した。これは「少年のジャケットの上の広いパンタロンでボタン留めにした、色のない、軽い素材」でつくられてい

る。こちらの方は、子供服として広まり知られている。(図3)

### スケルトンスーツ



図3. カール・ベンハートによる、少年のためのスケルトンスーツ

出典：文献3 p. 83

#### (3) ニュー・ハーモニーの影響

ニュー・ハーモニーやそのリフォームドレスはほとんど知られていない。団体組織が約2年と短命だったためだ。そのため後のリフォームドレスに直接影響を与えたという「証明」はない。また、同時発生とリフォーム・ガーマントとの表現の類似の説明もない。しかし、当時の贅沢で高価なドレスに対する反感から発生したというところは、後の1851年以降のドレスリフォーマーと共有する点がある。

#### (4) オネイダ・コミュニティ (The Oneida Community)

ジョン・ハンフリー・ノイズ (John Humphery Noys, 1811年-86年) がユートピア共同体を米国東海岸につくった。共同体は1831年に新興宗教となった。コネチカット州から、ニューヨーク州オネイダに引っ越した後に、リフォームドレスが提案された (1848年)。ノイズが創始者であり、堅固な統治者であった。共産主義と完璧主義で、財産を持ち込んでコミュニティ員になることができた。罪から自由になるのに、完璧主義が主張された。メンバーは最大で約300人程であった。

教義により複合結婚や優秀者の男性のみ子供を



図4. オネイダの若い女性「短いドレス」とパンタレット  
オネイダコミュニティ・マンションハウス  
出典：文献4 p. 55

作ることが出来、子供はコミュニティ全体に属した。ノイズは、女性のドレスについての考えを書き、同時代の女性のドレスを否定して、リフォームドレスを提案している。「性別の間の区別は大いに目立つ」ので、ノイズは「フロック (上着) とパンタロン」の子供服を、女性たちが着ることを提案した。つまり「短いドレス」とパンタレットである。半分男らしくみえる服装で、短髪にした。勤労のための、性別の区別のない服である。これには妻のハリエット・ホルトン・ノイズと会員のメアリー・クラギンが協力したが、コミュニティ員は、オネイダの服装に賛成しなかった。しかしその後、女性たちはこのスタイルの服装を着用した (図4)。

オネイダ・コミュニティのドレス改革の発案者が男性であり、このような男女の性別を区別することのない服装を、当時の女性たちは必ずしも喜んで着ていたわけではない。オネイダの原則 (信念) は、権利と女性の重要性によるのだが、女性と男性が真に平等という意味ではなかった。

この団体は1876年にジョンが去って以降、自然消滅 (1881年) となる。現在は、建物は残っており、オネイダは様々な製造、販売の企業として成功していたが、最終的には銀食器企業として2005年製造停止したが存続している。



## (5) Dr. メアリー・エドワード・ウォーカー

Dr. メアリー・エドワード・ウォーカー (1832-1919) はドレスリフォーマーとして恐らく最も有名である。彼女は短い丈のリフォームドレスとズボン自ら採用した最初の女性である。彼女は1832年ニューヨーク州オスウェゴに農夫の5番目の娘として生まれた。しばしば、男性の家族や労働者の伝統的な日課を行った。「幾分伝統的ではない」両親は、健康的な衣服として、ショートドレスとパンツを娘たちに勧め、生涯を「パンツ」で過ごした。ウォーカーは女性としてはじめて医師となり、南北戦争の後、勲章を授与されている。

19歳の時に、女性の権利のリーダーとして、「フリーダムドレス」を紹介した。おそらく距離も近いのでオネイダドレスのことをすでに知っていたのであろう。ウォーカーは教職をやめて、シラカス・メディカルカレッジに入学し、1855年に学位を取得した。彼女は、仲間から服を洗濯していないとか足を見せびらしているなど悪評であったにも関わらず、この時代にもリフォームドレス姿であった。同級生のアルバート・E・ミラーとの結婚式も含めてリフォームドレスに傾倒していった。名前も、「ミラー」または「M」をウォーカー



図5. 「リフォームドレス・スタイルのメアリー・E・ウォーカー」

オスウィーゴ郡の軍隊で着用したパンタロンのリフォームドレス ニューヨーク、オスウィーゴ歴史協会所蔵  
出典：文献4 p. 150



図6. 1865年のメアリー・ウォーカースカートのみとブレード装飾で女性らしい印象  
出典：文献5 p. 52

の前に置くことで旧姓を保持した。その後、ニューヨークのロームに診療所を開いた。しかし、2年のうちに夫婦は別離という結果になった。ウォーカーはドレスリフォーム協会と、禁酒、節制の活動に参加した。南北戦争の開始とともに、ウォーカーは陸軍の外科医の常勤を要求し、何度も否定されてもボランティアとして医療を続け、1864年政府との契約外科医として専門職の最下位の地位を得た。この頃、金筋の入ったズボンとフェルトの帽子にジャケットを着用した(図5)。しかし、ウォーカーはユニフォームで彼女の性を捨てて変装することは決してなかった。1864年に同盟の境界を越えて活動したウォーカーは投獄された後、南部の囚人との交換で解放された。アンドリュー・ジョンソン大統領は、報酬に値する価値のある国会の勲章を彼女に与えた。戦争後は、離婚問題や戦争での疲れで健康を害して、ヨーロッパへ休養のため旅行した。(図6)

女性の参政権やドレスリフォーム等の講演をしたが、人々はその内容よりも彼女の服装に関心があったようで、やじがとばされたりしたという。

彼女のドレスは長い暗いチュニックの衣服、ほぼ膝丈の身体の形の上に密接してフィットして、下へひろがっていく。ウエストコートを着て、懐中時計にチェーンを配置して男性たちが普段しているようないでたちであった。暗い色のズボン(「パンタレッタ」彼女はそう呼んだ)と、普通、

男性がはいているようなブーツで彼女の普段の服飾の完成だった。ダーク・グリーンの葉の軽い花輪が髪の上にあり、また、いつも勲章をチュニクの前につけて飾った。

ウォーカーは合衆国よりもイギリスでよく知られた。また、1886年、服装のために逮捕された。2度の逮捕の後に、女性が男性の服を着るのを許す法律が国会で通過したという言い伝えがある。このように、彼女は晩年、殆ど男性の服装で過ごしている。

#### (6) 健康法との関連

当時、ウォーターキュア (Water Care) という水治療法が東欧から伝わり、ラッセル・タッチャー・トレイル博士 (Dr. Russell Thatcher Trail) や弟子のジェイムス・C・ジャクソン博士 (Dr. James C. Jackson) 達により、ニューヨーク州や市に広められた。それは、水を飲み、シャワーや風呂等で温熱や水圧を使用した療法と食事制限等を併用した新しい健康医療であった。博士たちは、この健康医療法を施療する際、女性たちの健康のために、コルセットを着用しないリフォームドレスを採用している。

#### (7) 運動との関連

19世紀初期の運動用衣服は短いドレスとパンタ



図7. 19世紀初期の運動用衣服  
「エクササイズ・ドレス」Arkinson's Casket  
1832年4月  
出典：文献3 p. 93

ロンである (図7)。この「パンツ」は、子供の下着のドロワーズのパターンと示唆される。運動中の女性によってリフォームドレスの一種が個人的に着用されていることは重要である。19世紀初頭にすでに「パンツ」が運動用として着用されていた。また、農作業などの仕事着としても、既使用されていた。

#### おわりに

「ブルーマー・スタイル」が登場する1851年より以前にも、女性たちの「リフォームドレス」、「パンツ」の着用の様々な事例は、全米各地で見られたが、着用されたのは家庭等の私的な場であり、共同体などの閉ざされた環境であった。

その例が、ロバート・オーウェンのニュー・ハーモニー共同体の中で、人種や階級を問わない、男女平等のために考えられたものであった。経済的に見た目も平等な服装が、「短いドレスとパンツ」であった。また、宗教上で採用された理由は、(3)の事例では、男女の差がない、区別のない服、とう事からであった。これは統一という目的の為であったが、これらは男性の発案であり、着用する女性たちには多少とも不満があったということが事例(2)、(3)から分かった。どちらも閉ざされた空間の中でも着用であった。私的な場の事例(1)、(5)、(6)では、家庭の中で、健康、医学上の理由があった。女性が自ら選択して着用した事例(4)もみられた。このウォーカーの事例では両親の教育上および健康面からの配慮が発端のようである。しかし1851年のブルーマーズの出現と同時に成人してからは、彼女は女性の権利運動と関連してこの服装を生涯、着用し続けた。しかしブルーマー本人は、周りの反対や拒否、圧力により、数年で着用をやめている。一見、ブルーマー・スタイルの流行が定着しなかったようにみえていたが、信念を持って「パンツ」を着用し続けた女性がいたことがこのウォーカーの事例で確認できた。ウォーカーは、相当な批判も経験し、女性の権利運動にも関わったが、最終的には男性の服装の着用を選択した。当時の「リフォームドレス」はまだ、中途半端な発展途上のスタイルであったのであろうか。そしてウォーカーがたどり

着いた男性の服装スタイルはリフォームドレスが目指した終着点の一つといえるのだろうか。

「パンツ」の着用は、その発案が、子供服か出ている事例（2）、（6）と下着のドロワーズからの事例（6）がある。健康の面から着用された理由は、胴部を締め付ける針金や鯨の骨などのコルセットから解放されること、そして、クリノリンの針金の輪の重みがなくなる軽快さからであるのは容易に想像できる。

一方で、「パンツ」は農作業などの仕事着として、着用されていたようである。

これらのように、19世紀初期からアメリカ各地、東部、北部で着用されていたことや、医学的見地からヨーロッパ諸国でもコルセットのないリフォームドレスが採用されていたことから、1851年のブルーマー・スタイルの流行はまさに当時の社会情勢が反映された現象だったといえる。大流行したリフォームドレスはどのような経緯で着用されなくなったのであろうか、女性の権利運動家たちやリフォーマー達の「ブルーマー」のその後と社会現象についての詳細の研究を今後の課題としたい。

なお本論は、第9回アメリカ服飾文化社会史研究会にて2011年11月に発表したものに加筆修正したものである。

## 引用参考文献

- 1) 青木英夫：概説アメリカの社会と文化の歴史，源流社（1989年）
- 2) New York State Archives and Records Administration Cultural Education Center Albany, Junius Ponds Travel plaza, New York, 発行の絵葉書
- 3) Gayle Veronica Fischer: "Who Wears the pants? Women dress reform, and power in the mid-nineteenth century united states", UMI Dissertation Services, MI, p. 3-11, p. 80-89, p. 91-109, p. 114-115, p. 281-291, p. 353-355, 357 (1995)
- 4) Gayle Veronica Fischer : "Pantaloons And Power -A nineteenth-century dress reform in the united states", The Kent University Press, Ohio, p. 33-45, p. 75, 76, p. 79-116, p. 147-159, p. 166-169, (2001)
- 5) Alison Gernsheim: "Victorian and Edwardian Fashion: A Photographic Survey With 235 Illustrations," Dover Fashion and Costumes, New York, p. 52, (1963)
- 6) 日置久子：女性の服飾文化史 新しい美と機能性を求めて、西村書店（2006）
- 7) 谷田博幸著：『ヴィクトリア朝百科事典』河出書房新社、（2001）
- 8) 南静：パリモードの2000年、文化出版局（1975）
- 9) 濱田雅子：アメリカ服飾社会史、東京堂出版（2009）